

## 活動報告 (2016.1 ~ 2016.12)

### (1) 所員会議

第1回 2016年5月26日(木)

議題

1. 2015年度事業報告および決算報告について
2. 2016年度事業計画および予算について
3. 総合郷土研究所構成員の加入・継続申請について
4. 図書室とプロジェクト室の増設について

### (2) 運営委員会

第9回 2016年2月25日(木)

議題

1. 研究員の新規加入について

第1回 2016年4月28日(木)

議題

1. 2015年度事業報告および決算報告について
2. 2016年度事業計画および予算について
3. 総合郷土研究所構成員の加入・継続申請について
4. 2015年度研究費執行計画の変更について
5. 2016年度研究費の執行について
6. 2016年度豊橋市民大学トラムについて
7. 運営委員の役割分担について

追加議題

1. 創立70周年記念事業計画の策定及び予算申請について

第2回 2016年6月9日(木)

議題

1. 研究費の執行について
2. 前期購入図書アンケートについて
3. 2016年度豊橋市民大学トラムについて
4. 創立70周年記念事業計画の策定および予算申請について
5. 2017年度ブックレット執筆希望者の募集について

6. 大学記念館展示室の展示替えについて  
追加議題

1. 私立大学研究ブランディング事業について

第3回 2016年6月30日(木)

議題

1. 前期購入図書について
2. 2016年度紀要第62輯の発行について
3. 平成28年度立命館大学受託研究および間接経費使用計画書について

第4回 2016年7月28日(木)

議題

1. 2016年度紀要第62輯の執筆者について
2. 2017年度ブックレット執筆者について

第5回 2016年9月29日(木)

議題

1. 後期購入図書について
2. 2016年度補正予算について
3. 2017年度新規予算申請について

第6回 2016年10月27日(木)

議題 1. 後期図書購入について

2. 2017年度新規予算申請について

第7回 2016年11月24日(木)

議題

1. 2017年度予算申請について
2. 2016年度紀要第62輯執筆者の表題変更および研究費執行内容の変更について

### (3) シンポジウム

日時: 2016年10月8日(土) 13時30分~16時30分

場所: 愛知大学豊橋校舎 本館第3・4会議室  
テーマ: 「交流の歴史からみる三河・遠江・

「南信濃」

講演：「南信の人びとの暮らしをささえた物  
流—南信濃からみた遠江・三河—」

講師：多和田雅保（横浜国立大学教授）

講演：「近世三遠南信地域の社会的紐帯—遠  
江からみた南信濃・三河—」

講師：大塚英二（愛知県立大学教授）

講演：「三河における水陸の物流と秋葉信仰  
—三河からみた遠江・南信濃—」

講師：堀江登志実（総合郷土研究所非常勤所  
員、岡崎美術博物館副館長）

討論

#### (4) 公開講演会

日時：2016年3月5日（土）14時～16時

場所：愛知大学豊橋校舎 本館第3・4会議室

演題：「ふるさとへの感謝心理」

講師：武田圭太（総合郷土研究所所員、文学  
部教授）

日時：2016年5月28日（土）14時～16時

場所：愛知大学豊橋校舎 本館第3・4会議室

演題：「河原田遺跡発掘50年」

講師：栴原将人（総合郷土研究所研究員）

日時：2016年11月19日（土）13時30分～15時  
30分

場所：愛知大学豊橋校舎 6号館610教室

講師：清水敏子（しみずメンタルクリニック  
医師）

#### (5) 刊行物

愛知大学総合郷土研究所紀要 第61輯

社会調査から見た伊勢と伊賀のむら（ブック  
レット25）

#### (6) 地域見学会

文責：近藤暁夫

日時：2016年5月15日（日）

テーマ：足助—ASUKE

見学地：愛知県豊田市足助（図1参照）

参加者：45名（学生38名）

#### ■企画概要

2016年度の地域見学会は、前年度、40名を  
超える参加を得て成功裏に開催できた経験を  
踏まえ、前年度と同様に5月開催を目指して  
準備を行った。この日程を前提に、2015年度  
の地域見学会で得られた参加者へのアンケート  
での次年度以降の企画への要望・希望を踏  
まえて運営委員会で議論していく中で、2016  
年度においては、「普段、学生が行くことが  
難しい場所」「久しく地域見学会で訪れてい  
ない地域」の2つの条件を満たす地域を軸に  
選定することになった。また、2015年度の地  
域見学会の見学先が広域に至り、いささか詰  
め込みすぎとの感想が散見されたことから、  
2016年度においては、ひとつの地域でじっく  
りと見学できる方向性で企画を練ることが確  
認された。その中で、「豊田市足助」が、ひ  
とつの地域に古代から近現代に至る歴史的な  
資源を有していること、自然や民俗関係の見  
どころも豊富であることなど、この条件を満  
たす好適地であることが提案され、多くの賛  
同が得られた。

そこで、2016年度の地域見学会では、豊田  
市足助地区を取り上げ、その歴史・民俗・自  
然等を深く総合的に見学することを念頭に、  
企画を組み立てた。2015年10月の予備調査を  
経て、足助観光協会等現地とのやり取りを重  
ねつつ、具体的なスケジュールを練った上で、  
2016年4月に学内構成員（教職員・学生）を  
対象に、企画への参加募集を開始した。その  
結果、多数の応募を得ることができ、募集開  
始一週間で定員に達したため、結果として当  
初の募集期間を三週間前倒しで終了せざるを

えない盛況となった。

地域見学会参加者に対して行ったアンケート（配布40、回収38）においても「普段あまり行けない所に行けた」「以前から足助に行っていたと思っていました」などの好意的な感想が多く寄せられ、企画の狙いは達成できたものと考えている。

### ■当日のタイムスケジュール・見学地

当日のタイムスケジュールと行程を図1、表1に示す。以下、簡単に当日の行程と内容を説明する。

当日の天気は快晴、9時に愛知大学豊橋キャンパスに集合し、大型バスに乗車、出発する。車中では、まずスタッフの挨拶ののち、沿道の車窓景観の解説を適宜加えつつ、パンフレット（A4版で8ページ）をもとに当日のスケジュール等について説明を行った。資料等の説明は主に近藤が行ったが、20年以上前から足助で史料調査を行ってきた経験のある神谷所長にも適宜解説を加えてもらい、中馬街道の中継地点としての足助の重要性と歴史、その蓄積の結果として現在の街並みや香嵐溪の名勝が見られることを理解してもらった。図らずも、バスのルートも三河湾沿いの豊橋から、矢作川を渡り、三河山地の入り口にあたる足助に向かうという、かつて中馬街道を通り、足助で集散・荷分けされた海岸沿いの塩をはじめとする物資と同じルートを追体験する形となり、参加者には足助という土地の地理的条件を体感してもらうことになったと思う。

懸念していた交通渋滞もなく、ほぼ予定通り足助に到達し、まずは最初の目的地である足助城を目指した。標高300mあまり、足助の街からも150mほど高い位置にある足助城へのアプローチは険しい山道となる。大型バスでの到達は可能であるとの情報を事前に観光協会や足助城の関係者から得てはいたが、実際には対向車とのすれ違いもほぼ不可能な

状況であった。それでも、運転手のバスの大きさを完全に把握した「針の穴を通すような」ドライビングテクニックによって、無事、11時に足助城に到着した。

三河というよりも、太平洋側と内陸を含む中部地方の広域圏全体での交通の要衝である足助には、古代から支配者層が拠点となる居館を置いてきた。鎌倉期に当地を支配した足助氏は、居城を足助の街と街道に隣接した飯盛山に置いたが、足助氏が南北朝の動乱で衰退すると、新たに入った鈴木氏は、さらに要害の地である真弓山に城を築き、ここを拠点とした。ただし、鈴木氏の墓所は飯盛山にあり、完全に旧城地から手を引いたわけではないようである。この、真弓山上の城は、1590年の徳川家康の関東移封にともなって鈴木氏が当地を去ると廃城になり、400年を経た1990年から1992年にかけて発掘調査が実施された。発掘調査では、15世紀とみられる遺構がみつきり、これをもとに竹下内閣の「ふるさと創生基金」などを原資に、往時の姿への復原が行われた。1993年に公園として公開されている。天守閣（櫓）の形状など、当時の山城の姿をどこまで正確に復原しているかは疑問が残るものの、発掘調査に基づいた戦国期の山城の復原整備は全国的にも先駆的な事業（足助城パンフレットによる）となった。足助城の本丸跡からは、足助の街や飯盛山城跡を一望することができ、さらには三河の平野部や何重にも続く背後の山並みを遠望できる。参加者には、ここからまず足助の街の全体像と、足助の立地環境について体感してもらえただろう。

12時に、足助香嵐溪にある薫風亭にて昼食を取った。香嵐溪は、先ほど展望した飯盛山の麓にあり、交通の要衝から山城、宿場町を経て、観光地となった足助の重層的な歴史を体感しながらの昼食である。薫風亭は野外民俗資料館ともいえる「足助屋敷」内の設備であり、食事後は各自思い思いに屋敷内や飯盛



写真1 足助八幡にて

山・香嵐溪等を散策する時間を設けた。

足助屋敷前に再集合の後、新緑の香嵐溪を  
通って14時に足助八幡に到着した(写真1)。  
ここでは、足助観光協会の田口会長の出迎え  
を受け、まず田口会長に足助の歴史と現状に  
ついて説明をいただいた。その上で、4名の  
ボランティアガイドの方に、全体を4班に分  
けて足助の街並みを案内していただいた(写  
真2)。少人数で小回りの利く形で街並み  
を見学することができたのは、観光協会の皆さ  
まのご厚情によるものである。1時間半ほど  
足助の街並みを案内していただいた後は自由  
時間とし、16時に足助資料館に再集合する  
ことにした。街並みの案内では、街路から見  
える街並みと町家の外観観察だけでなく、普  
段は入ることのできない田口会長のご自宅裏  
の蔵(田口会長のご自宅は、江戸時代に遡る  
貴重な町家建築である)をご案内いただいたり、  
表通りから入って建物の裏口にあたる巴川側  
にある親水空間(往時には洗濯等で利用して  
いた)に通り返けさせていただいたり、地  
元の人のご案内ならではの貴重な体験をさせ  
ていただき、参加者も興奮していた。塩をは  
じめとする食材の集散地であった足助は、五  
平餅をはじめとする郷土料理でも知られて  
おり、道中でも購入できる機会が多い。参加  
者は、ときに思い思いに買い食いしながら、  
視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五感で、足助

という土地を感じていったことだろう。

特にアクシデントもなく、16時に足助資料  
館(この建物も大正年間に建てられた由緒あ  
る建築物である)に再集合し、16時20分に足  
助を出立した。往路と同じ経路で戻ったのち、  
豊橋駅前で一度希望者を降ろし、当初の予定  
通り18時に愛知大学豊橋校舎にて解散した。  
全体として、学生を中心にバスが満員になる  
ほどの参加者を得た上に、好天にも恵まれ、  
成功した地域見学会だったと考えている。



写真2 足助の街並みを見学

### ■参加者のアンケートから

参加者(スタッフを除く)に配布したアン  
ケートから、感想を簡単に紹介したい。表2  
にあるように、概ね、参加者からは好評を得  
られた。また、来年度の参加にも前向きな回  
答が多かった。これは昨年度もみられた傾向  
であるが、本年度は昨年度よりもさらに全体  
の満足度が高く、翌年度の企画参加に積極  
的な意思を示す参加者が多くみられたことが  
好材料である。特に、アンケート回答者のほ  
んどが学部学生であることを考えると、この  
ような好意的な評価や積極的姿勢は、総合郷  
土研究所の地域見学会が、学生の自発的な学  
びを促す教育面においても一定の成果を上げ  
ているものと判断でき、研究の枠を超えた意  
義を持っていることを再認識できる。

もっとも、今回の参加者、特に学部生にお  
いては、昨年度と同様に参加理由が「誘われ



て」という必ずしも自発的な理由ではないものが多い。企画の質については概ね評価が得られているので、それを十分に伝えて口コミにつなげ、参加を促す広報体制の構築や、リーダーの確保が引き続き重要であろう。

個別の感想では、昨年度同様に、「足助に行くのは初めて」「普段あまり行かないような場所へ行き、その地域の自然や歴史を知ることができた」など、知識としては知っていても、実際にはなかなか行くことができない場所に行けたことへの好意的な感想が多く寄せられた。また、「個人で行ってはなかなか見られないような建物の裏側が見れた」「足助は紅葉のときによく来ていたり、小・中学校等で来ていたりしましたが、いつもとは違う視点で見られてよかった」「新しい発見」などの感想もあり、ボランティアガイドの手配を含め、個人での旅行等では難しい、専門的な解説を直接現地で得られるという本企画の特長は十分に示せたと考えている。

また、昨年度は昼食が大変な粗食（企画の趣旨上やむを得ない部分はあったが）であり、少なからぬ不満が参加者から出されたことを踏まえ、本年度は五平餅をはじめとする郷土料理で著名な足助を対象としたこともあって、昼食は足助屋敷内のレストラン「薫風亭」を貸し切って提供した。その結果、「昼ごはんもとてもおいしかった」「去年よりもご飯がおいしかった」「健康によさそうな食事」「食事が豪華」などの好意的な感想が昨年度よりも非常に多く寄せられた。あくまで地域見学会である性質上、観光ツアーのような食事の豪華さを競うことや売り物にすることは避けるべきではあるが、どの地域にもその地域ならではの料理はあるはずで、それを堪能することもまた地域見学のひとつのあり方であろう。今後とも、地域見学に資する範囲で、食事の提供等を含めた企画全般を練っていく意義はあると考える。

企画への不満や要望としては、昨年度同様

に「自由時間が短い」「スケジュールが少し忙しい」「ちょっと時間に追われているような感じがあった」など、タイムスケジュール面での意見がみられた。盛り沢山の内容にしたいと思うのが企画側の人情であるが、特定の地域に関して、教員等が案内するだけの単なる物見遊山のツアーにせず、参加者個々人が地域に自分の目と足と頭でとことん向き合うというのも地域見学会のひとつの趣旨であろうことから、今後の反省材料といえる。

一般に、参加者が増えるほど集合等に時間を要し、スケジュールはタイトとなる。本年度は、近年にない参加者を得られたこともあり、運営面での戸惑いもなかったとはいえない。幸いにして地域の方々の厚いご協力を得て、本年度の地域見学会が全体として成功であったことは確信しているが、これに満足せずさらなる企画の充実を図りたい。

## ■謝辞

地域見学会の実施にあたって、足助観光協会、足助城、足助屋敷をはじめとする豊田市の皆さまには、企画の相談に乗っていただいた他、パンフレット等資料のご提供をいただきました。特に、足助観光協会の田口敏男会長ならびにボランティアガイドの皆さまには、ご多忙の中足助の街並みをご案内いただくなど、格別のご厚情を頂戴しました。研究所員の安福恵美子先生（地域政策学部）には、足助の観光に関する貴重な資料とご助言をいただきました。当日の参加者の皆さまには、アンケートにご協力いただきました。豊鉄バス運転手の松井さんには見事なドライビングテクニックでスタッフのマニアックなルート設定にお応えいただき、道中を安心してすごすことができました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

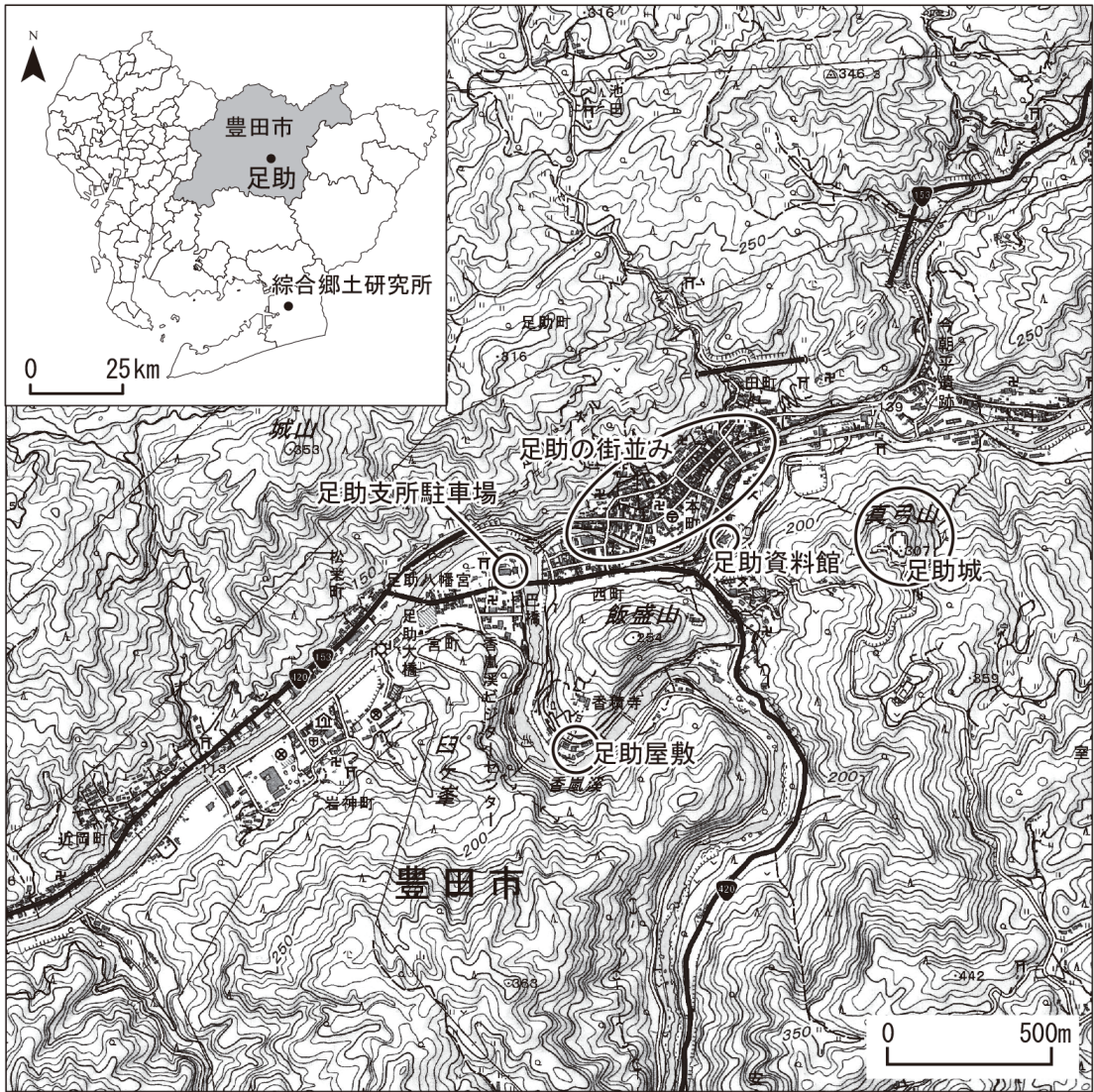


図1 地域見学会関係地点の概要  
(2015年発行2万5千分の1地形図「足助」に加筆)

活 動 報 告

表 1 総合郷土研究所地域見学会（2016年5月15日）タイムスケジュール

9:00	愛知大学豊橋キャンパス正門前集合（総勢45名）、貸切バスに乗車して出発 東名高速道路豊川インター⇒東海環状自動車道豊田環八インターを経由して足助へ
11:05	足助城（復原公園）着・見学 本丸から足助の街並みを展望
11:35	足助城を出立し、足助支所駐車場にバスを駐車、香嵐渓を徒歩移動
12:00	足助屋敷到着、屋敷内の薫風亭（くんぷうてい）にて昼食、昼食後各自散策
13:45	足助屋敷前に再集合⇒徒歩にて新緑の香嵐渓を見学しながら移動
14:00	足助八幡宮に到着、足助観光協会の田口会長とボランティアガイドによる街並み案内 街並みを案内していただいた後は各自自由行動
16:00	足助資料館にて再集合⇒足助支所駐車場に移動
16:20	足助支所駐車場出立⇒往路と同じ行程にて豊橋へ
17:45	豊橋駅前前で希望者は下車
18:00	当初の予定通り、愛知大学豊橋キャンパス正門前にて解散

表 2 地域見学会参加者アンケート回答結果の集計（配布・回収38件）

問：企画への満足度		問：参加のきっかけ		問：来年も参加したいか	
大満足	13 (6)	チラシ・掲示をみて	3 (8)	ぜひ参加したい	11 (3)
まあ満足	21 (23)	先生や同僚に誘われて	26 (23)	企画次第では参加したい	12 (24)
普通	3 (6)	友達に誘われて	3 (4)	参加する気はない	2 (0)
やや不満	1 (0)	その他	3 (0)	わからない	11 (6)
不満	0 (0)	無回答	1 (0)	無回答	2 (2)

※ カッコ内は昨年度の参加者アンケートの結果（回収35件）



## (7) 資料整理作業報告

2015年12月から2016年11月におこなった収蔵史料の整理について簡単に紹介する。

### 1. 新収蔵史料の目録作成

#### 美濃国大野郡随原村庄屋文書

(史料群No. 287)

美濃国大野郡随原村(現本巣市糸貫)庄屋の家に伝来の史料18点。2016年に当研究所が古書店より購入した。史料の宛所から、同村庄屋津屋佐七家に伝来の史料と思われる。

すべて横帳で、年貢収納の帳簿、関ヶ原宿の助郷や人足の賃金に関わる帳簿、人別に金銭を徴収した帳簿などで構成される。

大野郡の村々は中山道の助郷において、加納宿の代助郷となっているなど東方との関係が指摘されている(『大野町史』通史編、糸貫町、1982年)が、公儀御進発にあたり、西方の関ヶ原宿助郷にも関わっていたことがわかる(No. 2、4)。

また、銀や米を割り渡し貸し付ける(No. 5、6-1ほか)など、村が相互扶助を行っている実態も垣間見える。点数は少ないものの、この地域の実態を示す史料として興味深い。

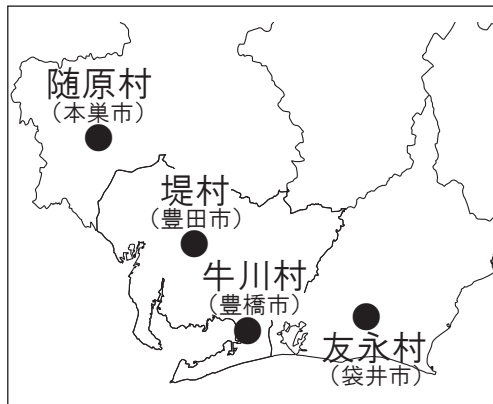
#### 遠江国豊田郡友永村文書(5)

(史料群No. 289)

2016年度に古書店から購入したもので、点数は240点。古書店の目録に掲載されていた情報から、今回と同じ古書店から昨年・一昨年度購入した友永村文書と一連のものと考え同じ史料群名をつけた。

一昨年度購入した分については、友永村の西尾伝蔵家の旧蔵文書であることが判明している(紀要第60輯参照)。今回の史料からは西尾伝右衛門-伝蔵と庄屋を継承し、近代に入って以降は、清谷寺・積雲院の信徒惣代などを担う過程から伝蔵-伝三郎-寛と家父長が継がれていったことがわかる。

ここでは清谷寺・積雲院の散田米・金銭の



関係地図

収支報告書(No. 173ほか)が年度ごとに信徒惣代らによって作成されているほか、境内の木を役所に無許可で伐採したことに端を発する寺の財産とその運用についての問題が発生し、それらに対応した書類(No. 107ほか)が残されている。

また、西尾寛氏の子息・誠氏が東亜同文書院に在学していたため、本学とも関わりの深い同文書院に關係する史料が23点一括綴りで存在する(No. 40)。そこには、金銭浪費が一因で退校処分となる者が多いため、余分な金銭を学生に送付しないよう父兄へ通知(No. 40-16)されるといった学生の生活を示すものや、新校舎の設計図(No. 40-17)も含まれており、わずかながら大正4～7年頃の同文書院の様子がうかがえる。

ただし今回購入した中には、西尾家以外に、元大蔵省御用掛であった同郡恒武村の小栗義一郎關係文書(約60点)や、信濃国南安曇郡豊科村關係の文書(約20点)を含んでいる。購入以前に混入したもので、その経緯は不明である。よって、現状のままを維持することとした。

なお、昨年度と同様に綴り直された痕跡がみとめられる。新しく付けられた表紙には、昭和の年次が見られた。今回もあきらかに後世の人の手が加わっていることは無念である。利用にあたっては再編・混入等々を考慮



し、慎重を期す必要がある。

### 村上忠順自筆写本

(史料群No.290)

2016年度に古書店から購入した和装本1点。「吉野川」と題された写本で、古書店の包みには「吉野川 忠順自筆」とあった。

村上忠順は、三河国碧海郡堤村の生まれで、刈谷藩の藩医を勤めるかたわら、藩主や藩士への学問の講義を行い、政治情勢についての意見も求められるなど、刈谷藩内において重要な人物であった。忠順は、古事記を中心とした国学の研究を行う国学者でもあった。尾張藩士で国学者の植松茂岳に古事記を学び、のちに本居宣長系統である本居内遠の門下ともなって、日本古学派の神道を重んじた(『村上忠順家所蔵図書目録』豊田市教育委員会、2009年)。

本史料は序文の署名に「四方樹庵あるし(主)」とみえる。忠順は蓬廬と号していることから、「蓬」「四方樹」=“よもぎ”は忠順を示すものと思われる。内容も神代についての写本であることから、忠順の行っていた古事記研究に連なるものであると考えられる。

### 2. 歌川研究室文書の整理

本研究の未整理古文書のうちに「歌川研究室より運び出したものカ」とメモが付された段ボール箱入りの文書群がある。

この史料群は、故・歌川學教授が整理・研究のために保管していたと思われるもので、先生が急逝されたために、当研究所に搬入されたと考えられる。しかし、具体的な経緯は定かではなく、後に購入した史料が混入している可能性もある。今後の整理の進捗状況によっては、名称も検討する必要がある。ただし現時点では、整理過程にあった歌川先生への敬意を込めて「歌川研究室文書」と呼称し、整理中である。

内容としては、三河国馬見塚村渡辺家に関

係する文書をはじめとした多種多様な史料群の集合体である。歌川先生や旧整理者による整理のもと、ある程度のまとまりがあることから、箱・封筒の状況を加味しつつ小史料群ごとに分類して整理を行っている。既に、分類整理を行った小史料群は以下の通りである。

小史料群	点数
吉田家中町方文書	128
尊勝院文書	20
加賀領江州今津弘川・海津村文書	11
村誌	14
大木村島田家文書	88
渥美郡保美村文書	2
新城能登瀬鈴木家文書	124
渡部家文書	74
金田村文書	52
新城村松屋山田家文書	12
バラ・個別史料	67

現在進行中のものには、上矢田村(西尾市)、日下部村(豊川市)、大和田村(新城市)のものが多くみられる。それぞれ貴重な史料群であることから、なるべく早く整理を行って目録化し、公開出来るように整備していきたい。

### 3. 八名郡牛川村松坂家文書

(史料群No.10)

今年度はおよそ4400点の資料の整理を行った。対象となった資料は、新田経営関係資料・土地売渡証文・借金証文・領収書・書状が圧倒的に多く、新田関係資料のなかには、高潮や地震による被害を知ることが出来るものが含まれていた。

そのほか、大塩平八郎の乱・桜田門外の変などの社会情勢を記した資料や、分家の初代喜右衛門忠慎の和歌なども見られた。

(文責 臨時職員 荒木亮子・山下智也)

